

ラデク・バボラーク ホルンリサイタル

ピアノ：菊池洋子

1部

ホルンソナタ ヘ長調 Op.17 …… ベートーヴェン

ロマンス Op.118-5 …… ブラームス
(ピアノソロ)

幻想小曲集 Op.73 …… シューマン

2部

小品集 Op.35より …… グリエール

間奏曲

悲しいワルツ

夜想曲

ロマンス

アルトホルンソナタ 変ホ長調 …… ヒンデミット

冬

四季コンサート²⁰¹⁹

2019年12月5日(木) 18:00開場 18:45開演

会場：アクトシティ浜松 中ホール

主催：浜松音楽友の会

プロフィール

ラデク・バボラーク (ホルン)

1976年チェコのバルドヴィツェ生まれ。8歳よりホルンを学び、89年よりブラハ音楽院でペドジフ・ティルシャル教授に師事、みるみるうちに頭角を現していった。ブラハ、ジュネーヴ、マルクノイキルヒェンに続き、94年、ミュンヘン国際コンクールで優勝、「美しく柔らかな音色」、「完璧な演奏」、「ホルンの神童」と評されるなど、世界の注目を集めた。以来、欧米アジア各地で活発な演奏活動を展開。これまでチェコ・フィル、ミュンヘン・フィル、バンベルク響、ベルリン・フィルのソロ・ホルン奏者を歴任。その他にもサイトウ・キネン・オーケストラ、水戸室内管をはじめとする世界のオーケストラにも参加、ソリストとしても共演を重ねる。小澤、パレンボイム、ラトル、レヴァインなどトップクラスの指揮者の信頼も厚い。ザルツブルク復活祭、フィレンツェ五月祭、サンクトペテルブルク白夜祭、ブラハの春、エルサレム室内楽フェスティバル、パシフィック・ミュージック・フェスティバル、サイトウ・キネン・フェスティバル等の音楽祭にも定期的に招かれている。また近年は指揮者としての活躍も目覚ましく、自ら創設したチェコ・シンフォニエッタとともにチェコ国内各地の音楽祭から招かれているほかハイドン、モーツァルトほかのCDもリリース、客演指揮者としてもベルリンはじめヨーロッパ内各地のオーケストラを、日本でも水戸室内管弦楽団をはじめ、国内各地のオーケストラにデビュー、再客演を続けている。2018年度には指揮者として初のポストとなる山形交響楽団首席客演指揮者に就任。

菊池洋子 (ピアノ)

2002年第8回モーツァルト国際コンクールにおいて日本人として初めて優勝。

国内外で活発に活動を展開し、いまや実力・人気ともに日本を代表するピアニストの一人。

2011年以降、シュレスヴィヒ=ホル

シュタイン音楽祭にたびたび招かれているほか、ブラハの春音楽祭などにも出演し、好評を博した。

2009、2018年にモダンピアノとフォルテピアノを用いて「モーツァルト ピアノソナタ全曲演奏会」を行い話題となった。

CD録音も活発に行い、エイベックスとオクタヴィアよりリリースしている。

第18回ミュージック・ベンクラブ音楽賞クラシック部門録音・録画作品(日本人アーティスト)、第1回上毛芸術文化賞(音楽部門)、第17回出光音楽賞の各賞を受賞。



© Yuji Hori

ラデク・バボラーク ホルンリサイタル



RADEK BABORÁK HORN RECITAL

●ベートーヴェン／ホルンソナタ ヘ長調 Op.17

この作品は1800年に当時の有名なホルン奏者ジョヴァンニ・ブントのために作曲されたもので、初演時にはベートーヴェン自身が伴奏を務めた。高い技巧が求められる曲だが、音楽自体は軽妙で楽しい雰囲気には溢れている。第1楽章はアレグロ・モデラートで、標準的なソナタ形式。冒頭は力強いホルンの演奏で始まり、スタカートや半音が見え隠れするテーマが現れる。提示部でのホルンのストップ奏法や再現部での静かに持続する高音のパスセージは、奏者に高い技術を要求している。第2楽章は、ボコ・アダージョ・クアジ・アンダンテでヘ短調。ベートーヴェンはこの楽章に、ゆったりとしたテンポでの死すら感じさせるような重く悲観的なテーマを与えている。この楽章でもスタカートが随所にみられるが、その効果は第1楽章とはまるで異なったものになっている。第3楽章はアレグロ・モデラートで、ロンド形式による遊び心のある音楽へと変わる。楽章中では強弱間の急激な変化がしばしばみられ、音楽のコントラストを形作っている。途中、甘い音楽が引き伸ばされるような曲調に変化するが、ここでもやはり大きな強弱変化の波が全体を支配する。作品全体においてベートーヴェンはホルンの持つ多様な音色を引き出そうと工夫している。

●ブラームス／ロマンス Op.118-5

1893年、ブラームスの最晩年に書かれた作品のひとつであり、それまでの作品で練られた和声進行や抒情性が凝縮されている。冒頭で提示されるテーマを繰り返しながら進行し、中間部で別のテーマが現れる。変奏を繰り返して展開していき、やがて再び冒頭のテーマが戻る。全体を通して、在りし日を懐かしむような情感で満ちた音楽になっている。

●シューマン／幻想小曲集 Op.73

1849年に作曲された作品で、全体は3つの小品からなる。第1曲めはピアノがホルンの旋律を導くようにして始まる。半音階による繊細な感情の変化を表出した甘美な旋律が印象的である。第2曲めは、コーダを伴う3部形式。ホルンとピアノは親密さを増し、呼応しながら音楽を紡いでいく。最初に提示された旋律は中間部で装飾を伴って現れ、最後に再び輪郭のはっきりした旋律となって引き継がれる。第3曲めもまたコーダをもつ3部形式。「急速に、活気をもって」と指示がある通り、ホルンに上行音形を用い、速度と緊張感を高めながら音楽が進行する。ややメランコリックな中間部を経て、長めのコーダで曲が締めくくられる。

●グリエール／小品集 Op.35 より 「間奏曲」「悲しいワルツ」「夜想曲」「ロマンス」

グリエールは20世紀初頭を中心に活躍したロシアの作曲家で、ロシア・ロマン派の継承者としてオペラやバレエ音楽から室内楽まで幅広い作品を創作した。作品35はピアノと管弦楽器の組み合わせに向けて書かれた作品で、11の小品からなる。「間奏曲」では、短くシンプルな動機がホルンとピアノの間を行き来しながら何度も繰り返される。曲全体が大きな山を描くように緩やかなダイナミクスを作り上げる。「悲しいワルツ」では、繰り返されるタイやシンコペーションに基づくリズム感が聴く者に独特の悲哀の情感をもたらす。「夜想曲」では、抑制的な伴奏によってホルンの息の長い旋律が奏でられ、次第に上行していくホルンの旋律が集中を保ちながら音楽の上昇を作り出す。「ロマンス」は、感情の揺らぎを表出したような情感にあふれた音楽が特徴的。シンプルながら感情を直接的に音の動きに反映させたようなホルンの旋律に対し、それを増幅させるように重厚なピアノが続く。終盤に向かって感情の大きな高まりをみせ、甘美さを保ったまま曲を終える。

●ヒンデミット／アルトホルンソナタ 変ホ長調

1943年に作曲された作品で、全4楽章からなる。第1楽章は、ABA'形式。穏やかなホルンの旋律とピアノによる動機の反復で始まる。最初の8小節で、時おり効果的な半音を挟みながら土台となる音楽が提示される。中間部Bでは、ピアノによる印象的なずらしたようなリズムと、大きなダイナミクスをもったアルペジオが現れる。A'の部分では、冒頭で提示した変容する和音をより緊密に繰り返したのち、次第に音域を広げながらホルンもピアノも高音へと上昇し、最後はホルンが柔らかな長い音色を奏でて終わる。第2楽章では一転してリズムが躍動的になり、音楽全体におけるピアノの動きの効果が高まる。前半は、ホルンとピアノが互いに音形やリズムを応答させながら進行する。途中で両パートが地を這うような低音を鳴らしたかと思うと、そこから音楽は次第に強まって緊張が頂点まで高まり、再び静まる。後半はピアノによる拍感をずらしたような和音と微細な運動に導かれ、制御を超えたように加速度的に終わりへと向かう。第3楽章はとても短い楽章で、非常にゆったりしたテンポで演奏される。ホルンによる象徴的な一音で始めると、ホルンの旋律にピアノは不気味な三連符の音形で応答しながら神秘的な音楽を奏でる。第4楽章には、ヒンデミット自身による「ポストホルン」と題された詩が付記されている。ピアノの激しい序奏がしばらく続いたのち、それを断ち切るようにホルンの緩やかで抒情的な旋律が現れる。ホルンが伸びやかな線を描くのと対照的に、ピアノは高音を高速で駆け巡って切迫したように和音の連打を挟み、最後はホルンの長音で余韻を残しながら幕を閉じる。